

研究論文

妊娠期における妊婦の取り組みの姿勢 —妊婦が取り組もうとしている出来事とその姿勢—

How Women Grapple with Pregnancy —Events and Attitudes that Pregnant Women Struggle with—

尾崎 暢 希 (Nobuki Osaki)*

本多 あんり (Anri Honda)***

北村 明 子 (Akiko Kitamura)****

矢田 典 子 (Noriko Yada)*****

北村 亜希子 (Akiko Kitamura)*****

岡田 順 子 (Junko Okada)*****

近藤 ひろ美 (Hiromi Kondo)**

眞野 晴 江 (Harue Mano)****

有光 由 美 (Yumi Arimitsu)*****

吉本 妙 (Tae Yoshimoto)*****

大塚 多賀子 (Takako Otsuka)*****

岸田 佐 智 (Sachi Kishida)*

要 約

妊娠24週から36週の妊婦21名に面接調査を行い、妊娠期の取り組みの姿勢についてKJ法による分類を行った。結果、妊婦は〈妊婦個人に関わる出来事〉〈日常生活に関わる出来事〉〈他者との人間関係に関わる出来事〉〈将来おこりうる出来事〉という4つの出来事に対し、〈状況を分析する〉〈状況をありのままに受け入れる〉〈生活の改善を図る〉〈将来に向けて準備する〉〈知識を広める〉〈自分や胎児をいたわる〉〈情緒の安定を図る〉〈自分の思いを大切にす〉〈他者を巻き込む〉〈周囲に気を配る〉〈状況や他者の思いを優先する〉〈何もできない〉という12の取り組みの姿勢を示していることが明らかになった。これらの結果から、妊婦は何らかの出来事に対し、目標に向かい心構えをしたり、実際の行動を起こすこともあれば、そうできない現実をあきらめたりといった様々な姿勢をとっていることが分かった。したがって、看護者は妊婦それぞれの取り組みの姿勢を理解し、妊婦が主体となって妊娠・分娩・育児に取り組める援助を提供することが必要である。

キーワード：妊婦・妊娠・取り組みの姿勢

I. はじめに

妊娠分娩産褥は生理的現象といえども、女性にとっては身体的、精神的、社会的に様々な影響を及ぼす。それに加え、近年、核家族化や少子化、女性の社会進出といった社会構造の変化、情報通信網の発達による情報の氾濫、環境問題から生じる胎児や母乳への影響などもとりざたされ、子供を産み育てようとする妊婦に対して様々な負担が生じている。このような状況の中で、妊婦は妊娠に対してどのように取り組んでいるのであろうか。

これまでの文献では、妊婦のもつ苦痛や不安、喪失感といった側面に焦点をあてたものがある^{1)~5)}。これらは、妊婦がホルモンの変化により情緒が不安定であること、母親役割への変化のストレスを体験していること、子供との関係・夫との関係を再構築しなければならないこと、分娩に望むための準備、生活上の変化に対する戸惑いや否定的感情を有し

ていることを示しており、それらの苦痛やストレスを軽減していく看護の必要性を述べている。

一方、妊娠経過にそって出産に対するイメージ内容を分析した文献がある⁶⁾。これによると、妊娠中期では産痛に対して痛いもの、怖いものとイメージするだけでなく、避けられないものであると受け止めようとしていること、頑張っ産もうと意欲が出てくること、妊娠末期になると、分娩経過などを具体的にイメージすることにより、自分で産むんだ、呼吸法で陣痛を乗り切ろうと、出産に前向きであるという結果が示されている。また、妊娠中の分娩に対する対処行動を明らかにした文献⁷⁾では、「問題解決志向的対処」として、母親学級への参加や人や本から情報を得るといった情報探求の行動、呼吸法の練習や頑張る、努力するといった問題と取り組もうとするコーピング様式があり、「感情志向的対処」として、考えないようにしているといった回

*高知女子大学 **仁淀病院 ***高知赤十字病院
*****国立高知病院 *****高知県立中央病院

****高知市民病院 *****高知県立安芸病院
*****幡多けんみん病院

避や、助産婦におまかせ、何もかも不安、怖いといった感情の表出があった。

つまり、妊婦は妊娠中に生じるストレスから不安や苦痛を感じながらも、理想を持ち、自分の意志で努力したり、また他人に頼ったりと、様々な取り組みをしていることが考えられる。しかし、このような妊婦の取り組みの姿勢に関して明らかにしたものはみられない。このような取り組みの姿勢を明らかにすることで、保健指導などにおいても、妊婦の主体性を重要視した適切な看護介入方法を知る手がかりになるのではないかと考える。

研究疑問

- ① 妊婦はどのような状況に対して取り組みようとしているのだろうか。
- ② 妊婦はどのような取り組みの姿勢をもっているのだろうか。

II. 本研究の概念枠組み(図1参照)

本研究の概念枠組みは「妊娠」「分娩」「育児」についての文献から、妊娠期の取り組みの姿勢に関連すると思われる項目を抽出分析

し作成した。本研究での「妊婦の取り組みの姿勢」とは、その人が妊娠したことによって生じた状況や将来生じる状況に対して、自らの意識や意図から何か行動しようとしていることと考える。これには、妊娠、出産、育児に向けて自己調整しながら行動し体験の意味を見いだす過程と、周囲に期待することがあり、このような体験の結果から満足感が生じる。この満足感は取り組んできた過程に影響され、ポジティブ、ネガティブ、アンビバレントといった側面が含まれると考える。以上のような取り組みの姿勢を通して母親としての成長がみられる。また「現代妊婦の風潮」は取り組みの姿勢に影響を及ぼすものと考え

III. 方 法

(1) 対 象

調査者の勤務する6病院に定期健診のため来院している妊娠24週から36週のローリスクの妊婦に、本研究の目的、協力内容を説明し、協力に同意した21名の女性とする。妊娠24週

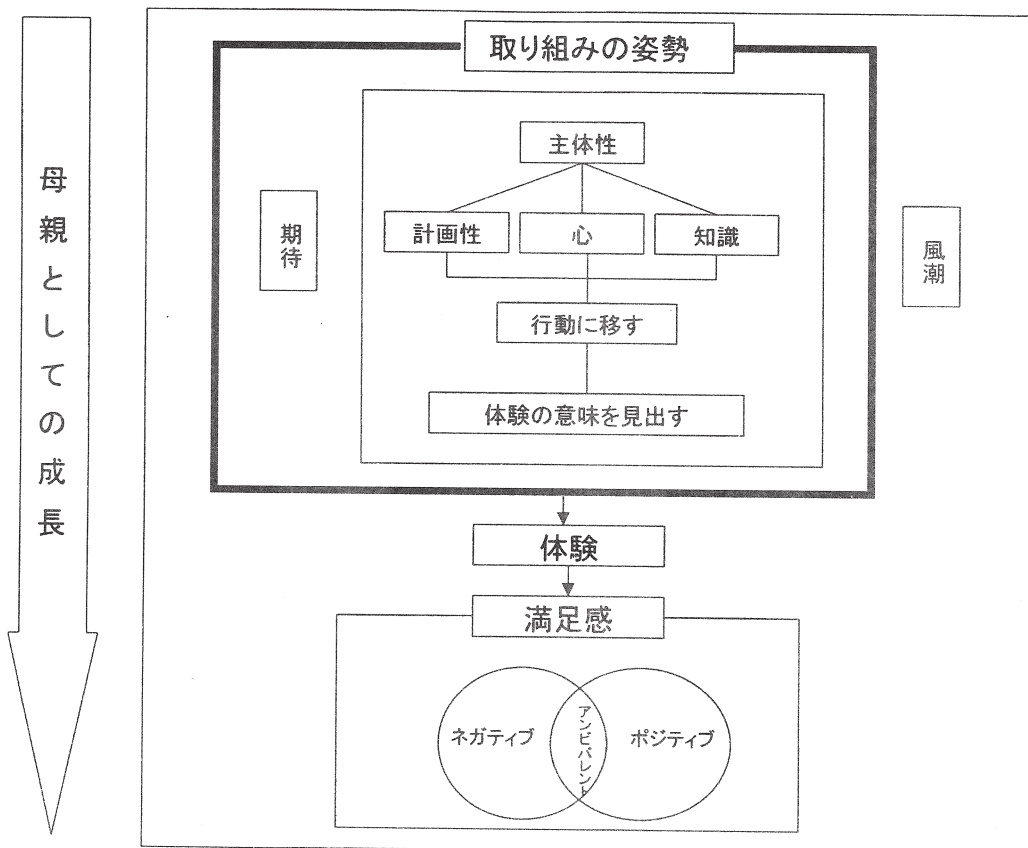


図1 本研究における「妊娠の取り組みの姿勢」

以降では妊娠の半期が経過しており、妊婦にとってその期間に生じていることや取り組んできたことが明確になり、また分娩に関しても考え始める時期である。

(2) データ収集期間

平成9年4月～平成9年10月

(3) データ収集方法

本研究の概念枠組みに基づいて半構成的インタビューガイドを作成し、それに添って30～60分の面接調査を行った。

(4) 分析方法

面接内容を対象者の承諾によりテープに録音し得られた情報を逐語的に文章にした。それをデータとして、妊婦が取り組もうとしている出来事およびそれへの取り組みの姿勢に関連した現象を抽出し、KJ法による分類を行った。分析については、12名の研究者間で一致がなされるまで検討していった。また、分析を重ねていく中で、対象者21名の時点で、データがある程度飽和化されたため、データ収集を中止した。

Ⅳ. 結 果

1. 対象者の属性(表1参照)

対象者は、21名で、年齢は22才から38才、平均29.6才であった。面接時の妊娠週数は24週から36週、初産婦10名経産婦11名であった。

2. 妊婦が取り組もうとしている出来事(表2参照)

妊婦は、妊娠することにより、自らが考えたり何らかの方法で対応しようとする様々な出来事に遭遇していた。この〔妊婦が取り組もうとしている出来事〕として、〈妊婦個人に関わる出来事〉〈日常生活に関わる出来事〉〈他者との関係に関わる出来事〉〈将来おこりうる出来事〉の4つが明らかになった。

1) 〈妊婦個人に関わる出来事〉

これは、妊娠することで妊婦自身の身体的精神的側面に関する変化が生じることで、『身体』『心』『自己像』の3つがあった。

① 『身 体』

これは妊婦自身の身体の性質や状態などに、妊娠する前と違いが現れる出来事である。外見的なものとして、腹部増大による変化や体重増加、また生理的なものとして、つわりや

表1 対象者の背景

ケース	年齢	Para	妊娠週数	家族構成	職 業	学 歴	備 考
1	31	1-1-0-0	33 w	夫・夫の母	無	高 卒	
2	35	3-1-2-2	30 w	夫・子供2人	教 師	大 卒	
3	24	3-3-0-0	31 w	夫	看 護 婦	高 卒	
4	25	1-1-0-0	33 w	夫・実父母	看 護 婦	看護学校卒	
5	30	0-0-0-0	32 w	夫	理容業手伝い	高 卒	
6	31	1-1-0-0	27 w	夫	エントリーオペレーター	高 卒	前回流産
7	28	0-0-0-0	34 w	夫	無	短大卒	人工受精
8	32	1-0-1-1	28 w	夫・子供1人	無	大 卒	喘 息
9	29	1-0-1-1	26 w	夫・子供1人	助産婦	助産婦学校卒	
10	28	1-0-1-1	30 w	夫・子供1人	ピアノ教師	大 卒	
11	38	2-1-1-1	36 w	夫・子供1人	看 護 婦	高 卒	
12	24	0-0-0-0	34 w	夫	無	大 卒	
13	35	3-1-2-2	24 w	夫・子供2人	助産婦	助産婦学校卒	
14	31	2-1-1-1	35 w	夫・子供1人	無	短大卒	
15	22	0-0-0-0	34 w	実父母・兄2人	無	高 卒	
16	30	1-0-1-1	36 w	夫・子供1人	無	短大卒	
17	35	5-3-2-2	27 w	夫・子供2人	看 護 婦	看護学校卒	
18	23	1-0-1-1	24 w	夫・子供1人	無	中 卒	
19	25	0-0-0-0	30 w	実 母	無	中 卒	妊娠中離婚
20	34	4-2-2-1	34 w	夫・子供1人	無	短大卒	死産/流産の既往
21	31	0-0-0-0	28 w	実母・夫	自 営 業	高 卒	

胎動、がある。「サッと動いたらお腹が痛くなったりするんですよ」と腹部緊満という変化を感じているケースがいた。これらは生理的な変化であるが、妊婦特有の体型に対する抵抗感があったり、腹部緊満などは異常を示す徴候である可能性もあり、妊婦にとって取り組もうとする出来事になっている。

② 『心』

これは、妊娠前と比べ、妊婦の精神状態の変化が現れることである。妊婦は様々な情緒的变化を味わっており、その多くはホルモン分泌の変動によると言われている。しかし「妊娠により情緒的に不安定になった」「他者との付き合いに対して内向的になった」「分娩など未知の体験に対する不安」など、不安が生じたり、感情の変化が日常生活や対人関係に影響していた。

③ 『自己像』

これは、妊娠前の自己から、新たな自己に気づくことによって生じる出来事である。妊婦は妊娠という事実を通して、今までの自己から胎内に児を宿しているという、母親としての自己が芽生え変化している。そして「意識はまだないと思うが、漠然とした実感がある」「しっかりしていかなと、今までのままじゃ」というように今までの自分や、母親としての自覚をもつ自己を見つめ、理想をもつ

たり、新たな自分を受け止めようとしている。

2) <日常生活に関わる出来事>

これは、妊娠することで今までの生活の習慣やリズムが変化する、あるいは余儀なく変更させられる出来事で、『生活』『嗜好』『仕事』『情報』『社会的手続き』があった。

① 『生活』

これは生活パターンや行動範囲、生活手段などの生活にまつわる出来事である。妊婦は妊娠したことにより、行動範囲が狭まること、それまでの生活パターンが変化することを感じたり、逆に今までと生活パターンが変わっていないことを感じていた。ケース4は妊娠してからも仕事中心で、夫より帰りが遅く、家事を母親まかせにしてきたという生活について「子どもができたなら、きちんとした時間に帰ってきて、子どもが保育園とかから帰ってくる時間にはいつでも居れるような家庭を作っていきたいなあ」と今までと同じ生活パターンを、変えていきたい出来事としてとらえていた。このように、妊婦は毎日の生活の中で平時に行ってきた自分の役割や家事の内容などを改めて考えたり、制限の中でいかに生活していくかということに取り組んでいた。

② 『嗜好』

これは、妊娠前からの妊婦の行っている習慣であり、喫煙などである。ケース21は、今まで日常生活の中で喫煙が習慣となっていたが、妊娠により、やめなくてはならない出来事となっていた。

③ 『仕事』

これは、妊婦が今まで行っている仕事に関する出来事である。妊婦は今までの仕事の内容や時間に負担を感じたり、産後もその仕事を続けるかどうかの迷いから、転職や休職、軽い仕事への変更などを考えていた。ケース9は「やめたくないけど、仕事自体は。けれどやめざるを得ない環境になるかもしれないし…実家が遠いから頼れる者もない…正直言って転職なんかもね」と話している。仕事は今後の育児や家事に加え、経済的側面や生き甲斐などに関わってくることであり、妊婦にとって取り組もうとする出来事になっている。

表2 妊婦が取り組もうとしている出来事

妊婦個人に関わる出来事	身 心 自 己 像	体 像
日常生活に関わる出来事	生 嗜 仕 情 社会的手続き	活 好 事 報
他者との関係に関わる出来事	胎 上 の 夫 周囲の人間関係 支 援 者	児 子
将来起こりうる出来事	分 育 将 来 の 計 画	娩 児

④ 『情報』

これは、妊娠や出産、育児などの情報に関する出来事である。妊婦は妊娠中の変化、分娩時の呼吸法や陣痛、母乳栄養や乳房の手入れ、妊婦体操などについての情報を得ようとしていた。「やっぱり周りに相談する人がいないので色々なことが気になる。近所の人から(腹部が)ちょっと大きいんじゃないかとか言われると、本とかで見るしかない」と話したケースがあった。このように、疑問に思ったり、知らずに不安になる情報などに対して、妊婦は取り組もうとしていた。

⑤ 『社会的手続き』

これは、婚姻届など法律上決まっていることや、結婚式といった社会的な手続きに関して対応が必要とされる出来事である。妊娠した時点で婚姻しておらず、その手続きのプロセスや形式にこだわりがあるケースがあった。ケース1は「絶対結婚してからの出産という形で“できちゃった結婚”は絶対いやと思っていたのに、間違ってしまった…」と話し、特に結婚式や新婚旅行といった世間一般で行われている出来事をあげていた。

3) <他者との関係に関わる出来事>

これは、妊婦をとりまく人々との関係が今までとは変化することにまつわる出来事で、『胎児』『上の子』『夫』『周囲の人間関係』『支援者』がある。

① 『胎児』

これは、今回妊娠した胎児に関することである。妊婦は、日増しに大きくなる胎児との新しい関係を作り上げることが必要とされる。ケース12は、「やっぱり(腹部が)出てくるとすごい、ああ居るんだなって、毎日どんな時も思い出すっていうか…」と話している。このように、胎児の存在を意識し、自分の子どもとして胎児に対する希望や願いなどを持ち始めていた。

② 『上の子』

これは、経産婦の場合で、胎児と兄弟になる上の子どもに関することである。妊娠により上の子の態度や言動が変化し、上の子と妊婦自身との関係や家族関係が今までと異なってくる。妊婦は、上の子が今までと違って甘

える、赤ちゃん返りをする、成長しているなど、変化が生じていることに気がついていた。また、妊娠が分かった時点で上の子に「赤ちゃんがお腹にいる」と教えたケースもあった。このように妊婦は上の子に対して、新たな家族が増えること、それによって生じる家族内の関係の変化などに取り組もうとしていた。

③ 『夫』

これは自分の夫に関することである。夫は一番身近な存在で、妊婦は協力や精神的サポートをしてくれる存在と認識している。「もうちょっと妊婦であることを気遣って欲しい。せめてやさしい言葉だけでもいいから」というケースや、自分が分娩で不在の時に、上の子の面倒がみられるように夫にかかわっていくケースがあった。このように、自分が妊娠しているという特別な状況で、夫に対して普段とは違うことを求めるような取り組みなどがされていた。

④ 『周囲の人間関係』

これは、実父母、義父母また従兄など自分を取り巻く人々に関することである。ケース9は、妊娠が分かってからも流産などの危険がある時期を過ぎてから、両親に妊娠を報告していた。また、ケース12は「週末ですけど帰ってきたらやっぱりまあ『生まれると一番大変になるから、今はじゃあゆっくりしときなさい』っていう感じで家事も殆どしてないですし、全部何か頼ってます」と話していた。このように、妊娠によって周囲の人々の期待や支援など、今までの関係が微妙に変化するため、その関係性を調整したり、精神的な安定を得ようと頼ったりという取り組みがされていた。

⑤ 『支援者(キーパーソン)』

これは妊娠や分娩に関して血縁や婚姻関係以外の人で支援をしてくれる人のことである。妊娠中に離婚したケースでは、実母も体が弱く、前の仕事場の同僚である隣人が支援者となっていた。

4) <将来起こりうる出来事>

これは『分娩』『育児』『将来の計画』という、将来必然的に起こると考えられる出来事である。

① 『分娩』

これは分娩を想定した時に生じる感情や陣痛のイメージ、また実際の分娩の準備などに関する出来事である。妊婦は分娩を想定した時、無事に生めるかという不安や恐怖、痛いというイメージをもち、その不安からのがれようとしたり、また自分の理想とする分娩に近づこうと取り組もうとしていた。また分娩時に入院することによって、残された家族が困らないような準備もしていた。

② 『育児』

これは児の誕生後、避けては通れない育児に関することである。妊婦は、育児に対する心構えや子供への理想を持ち、母乳栄養について考えるなど、育児の準備をしている。ケース6では「わがままにはしたくない、子供にも英語は困らないように小さいうちから習わしたいと思っています。…夫が子供にも一人で泳げるようにしたいと言っていました」、ケース5は「なるべくなら母乳が出てもらいたいという感じ。このあいだ母親学級で習いました。こうお風呂に入った時(お乳の手入れ)ちょっとやってるような状態ですけど」など、育児に対して取り組んでいた。

③ 『将来の計画』

これは生まれて来る子供の性別や子供の数についてである。今回の妊娠で子供の数は計画通りであっても、性別に不満があり、もう一人出産してみるかどうか悩み考えたりするケースがあった。

3. 妊婦の取り組みの姿勢(表3参照)

妊婦はこれまで述べてきたような出来事に対して取り組んでいたが、その取り組みの姿勢として以下のような12の姿勢があることが明らかになった。

1) <状況を分析する>

これは今、自分に何が起きているのか、将来どのような状況になるのかなど、状況を分析していく姿勢である。これには、『事実を明らかにする』『過去の体験を比較する』『他者と比較する』『分析する』『予測する』『計画を立て目標を持つ』があった。

例えば、ケース11は医療施設に受診する前に、自分で検査を行い、妊娠という事実を確

認していた。ケース8では自分が喘息をもっていることや、前回の出産時に乳房の手入れや指導を受けられなかったと今までに自分の受けた看護を分析し、今回は看護レベルが高く、喘息もみてもらえる病院で出産しようと、計画をたてていた。同じくケース8は、前回の出産時について「いきんではいけない時を上手に過ごせずつらかった」と振り返り、その時を乗り切れるような心構えをもとうとしていた。この〈状況を分析する〉姿勢から、より具体的な手段や目的が生じていた。

2) <状況をありのままに受け入れる>

これは妊娠経過の中で、生じる様々な出来事や変化をありのままの出来事として捉え、それを受け入れたり楽しんだりする姿勢である。これには、『今まで通りにする』『何とかなると考える』『受け入れる』『正常性を願う』『利点を探す』『状況を楽しむ』があった。

ケース21は「結構周りは(出産が)軽い人が多い。今、考えても仕方ない」と、初めての出産に対して『何とかなる』という姿勢であった。また、かわいいマタニティを着ることで妊娠による利点を見つけたり、健診時に超音波画像で胎児をみることに楽しみを見いだしているケースもあった。

3) <生活の改善を図る>

これは妊娠を機会に、よりよい生活を送ろうとしたり、負担がかからないように、生活を改善しようとする姿勢である。これには『調整する』『工夫する』『これまでの生活を変える』があった。

具体的には、規則正しい生活に変えていったり、無駄遣いをなくすといった工夫などがあった。また、ケース11は妊娠前よりも、何かあった時の連絡がすぐとれるように夫と調整していた。

4) <将来に向けて準備する>

これは妊娠・出産・育児の事を考え自分で予測判断できる範囲の中で準備していく姿勢である。これには『心構えをする』『実践する』『準備する』があった。

例えば妊娠・出産・育児に対しての心がま

えを持つことで心の準備をしたり、母親学級を受講し呼吸法を行い実践する、また実母の病気により面倒をみなければならず、同居の準備を行ったりしているケースなどがあつた。ケース6は「赤ちゃんが産まれると、やることも増えてくる。初めてで分からないことばかりだし。今から覚悟して、心の準備をしている」と話していた。

5) <知識を広める>

これは専門書・親族・知人・専門家などから妊娠・出産・育児に関する情報を得たり、相談をしたり、参考にしたりする姿勢である。これには『情報を得る』『相談する』『参考にする』があつた。妊婦は超音波画像をみる、本を読む、人の話から情報を得る、身体的不安や健診費用等について専門家に相談するなど、様々な情報から状況を把握したり、妊娠・出産・育児の準備をする時の足しにしていた。

その中でもケース16は「色々な情報が入ってくるので、どれか一つ自分が一番共感できるものを図書館に行ったりして選んでいます」と、多くの情報を全て取り入れるのではなく、自分が必要としているものや、自分にあつた情報や知識を得ようとしていた。

6) <自分や胎児をいたわる>

これは、妊娠中に起こる身体的な変化に伴い、自分自身や胎児に負担がかからないように、また異常を予防しようとする姿勢である。これには『無理をしない』『慎重になる』『制限する』『避ける』があつた。

ケース13は「仕事の関係で休みはとりにくいけど、自分の動きの中で休みをとったり、体に合わせて動いたりとか、食事も気をつけている」と、無理をしないような取り組みをしていた。

7) <情緒の安定を図る>

これは、妊婦が妊娠経過・家族関係または妊娠による生活の変化によって精神的に不安な状況に置かれても、気持ちの切り替えを行なったり、励ましながら自分なりに心を安らかにしようとする姿勢である。これには『気持ちの切り替えをする』『自分に言い聞かせ

る』『閉じこもる』『愚痴をこぼす』があつた。

ケース6は妊娠経過で異常があつたりしたら「自分だけが…」と落ち込んだ気持ちになり、黙ったり、自分のからに閉じこもる様なこともあるが、イライラしてもしようがないからと、自分で気持ちの切り替えを行っていた。

8) <自分の思いを大切にする>

これは、妊娠によって生じる何らかの問題や分娩に関して、誰かに頼ることなく自分の力を活用してさまざまな出来事を乗り越えようとするのである。これには、『待つ』『欲求に任せる』『こだわる』『気にかける』『思いを貫く』『自分の力で解決する』があつた。

例えば妊娠中であっても、結婚式を挙げたい、新婚旅行にも行きたいという自分の思いを貫き行動したり、体重コントロールについて理解していながらも、自分の欲求のまま食事をするというケースがあつた。

9) <他者を巻き込む>

これは、夫・両親・知人・医療スタッフなどを上手に活用したり、自分自身の考えに沿った行動をとってもらおうと、自分の立場に巻き込むことである。これには『他者を利用する』『他者に指示する』『他者を教育する』『説得する』があつた。

ケース11は「子どもが病気した時に、最低限するべきこと、水分を取るとか、大事な事は夫に言う」といったように、分娩で不在の時の家事や、子どもに対しての指示や教育を夫にしていた。また、妊娠や分娩の体験を夫と共有したいといった姿勢もみられた。

10) <周囲に気を配る>

これは夫や上の子・親族に対して精神的負担を与えないように、自分に生じている出来事を報告したり、感謝の気持ちを表すなどの、周囲に気遣う姿勢である。これには『他者を配慮する』『報告する』『感謝する』があつた。

死産と流産を経験しているケース20は「自分の母も姑も体が丈夫じゃないんで、心配をかけたくなかった。子どもがまただめになつたっていうのは嫌ですから、(妊娠したことを)言ったのは3ヶ月くらいだったでしょう

か」と、両親に妊娠したことを報告する時期を考慮していた。また経産婦では上の子の精神的変化を考慮した対応を考えているケースもあった。

11) <状況や他者の思いを優先する>

これは、自分には何らかの思いがあるにも関わらず、それよりも他者の意見を優先して受け入れる姿勢である。これには、『我慢する』『あきらめる』『言いなりになる』『他者に期待する』があった。

ただ自分では何も行動しないで他者に期待するのみというケースや自分の思うようにできない状況を仕方ないとあきらめながらも受け入れようとしているケースがあった。

12) <何もできない>

これは、妊娠によって、予定外の妊娠や妊娠による身体の変化や、育児のイメージ化ができず、とまどいを感じたり、自己が受け入れられない助言に対してストレスを感じ、なんとかしたいと思いつつも、何も対応できない精神的状況から抜け出せない姿勢である。これには『戸惑う』『対応できない』『現実とのギャップを感じる』があった。

ケース15は「みんな、痛いとか言うじゃないですか。ずーっと聞いているんで、結構びびってるんです。痛いことは想像つくんですけど、実際そうになったらどうなるんだろうって」と、陣痛について漠然とした想像しかできず、恐怖感をいだいた状況となっている。

V. 考 察

1. 取り組もうとしている出来事の特徴

妊婦は<妊婦個人にかかわる出来事><日常生活にかかわる出来事><他者との関係に関わる出来事><将来起こりうる出来事>という4つの出来事に対して何らかの方法により対応しようとしていた。これらは、妊娠によって生じる身体的、精神的な変化だけでなく、日頃何気なく行っている生活習慣や、将来の育児や計画など、その内容が多岐にわたっていることが分かった。

2. 妊婦の取り組みの姿勢の特徴

妊婦は、妊娠することにより子どもを産み、育てていくことになる。今回の結果でも、『将来起こりうる出来事』として分娩や育児に対し、取り組もうとしている状況があった。そして、その取り組みの姿勢には、<将来に向けて準備する>といったものがあった。この中には、母親学級に参加する、呼吸法の練習をするといった、実際の行動だけでなく、母親になるという意識や、責任感をもつといった、母親としての心構えも含まれている。また、分娩や育児について今考えても仕方ないと、<状況をありのままに受け入れる>といった姿勢、恐怖感をもち、<何もできない>といった姿勢もあり、ひとつの出来事に対して、複数の取り組みの姿勢があった。

本研究での概念枠組みでは、取り組みの姿勢を、「妊娠・出産・育児に向けて自己調整しながら行動し体験の意味を見いだす過程と、周囲に期待することがある」とした。しかし、これらの結果をみると、目標に向かい心構えをしたり、実際の行動を起こしたりすることもあれば、そうできない現実をあきらめたり、特に目標はもたず、現状を受け入れたりするといった様々な姿勢があった。つまり、取り組みの姿勢は何かに向かい、意図し、行動するといった一方向性のものではないことが分かった。

また、「体験の意味を見いだす」といったことを考えると、今回の結果からは、意味を見いだすという取り組みに関したものがあまりみられなかった。これは、妊婦が妊娠ということよりも、出産という「子どもを産む」ことにゴールを想定しやすいのではないかと考えられる。つまり、出産というゴールに対して、妊娠期はその過程にすぎず、妊娠中の体験からある意味を見いだすことにはつながりにくいのではないだろうか。

宮本によると、長期的な視野からみると、対処行動を重ねるうちに様々な結果が生じること、適切な対処行動を蓄積すればストレスが解消されるだけでなく、充実感や健康度が高まることを述べている⁸⁾。つまり、妊娠中の取り組みの姿勢の一つだけで、結果に直接結びつくのではなく、取り組みの姿勢をいく

つか持ち合わせ、その時期で適切に取り組むことによって、その妊婦にとって意味のある結果に近づくと考えられるだろう。

3. 妊婦の意志を尊重した取り組みの姿勢に対する援助

最近では、インフォームドコンセントや自己決定を尊重することの重要性がさかんに言われている。出産に関しても、看護者は専門家として、妊産婦のニーズに応える必要性に加え、女性をケアする温かいところと、女性の意志を尊重する姿勢、情報と説明の提供などが、ケアの重要な要素となっている⁹⁾。

有森は出産方針に関する妊産婦の自己決定について、出産時に専門家の判断を必要とする「会陰切開」「点滴の使用」などでは、自己決定するよりも、専門家に委ねる選択がされているが、「陣痛中に歩く」といった正し

い知識をもつと、自分で対処できる行為について自己決定を行っていることを明らかにしている¹⁰⁾。このことは、妊娠中に妊婦は自分では解決できない専門的な問題や、少しの知識があれば自分の力でなんとかできることにも、悩んでいる状況が多くあることを示している。

実際の臨床の間では、母親学級に参加しない妊婦や、指導を繰り返しても行動変容がみられない妊婦に対して、看護者は自分の主観で評価しがちである。しかし、本研究の結果から、妊婦は妊娠によって生じる様々な出来事に対して、結果的には問題の解決になっていない場合でも、何らかの取り組みをしようとしていた。この、妊婦それぞれの取り組みの姿勢を理解し、共に考える姿勢を看護者をもつことで、より、妊婦個人に適した保健指導の実践につながるのではないだろうか。ま

表3 妊婦の取り組みの姿勢

状況を分析する	事実を明らかにする 他者と比較する 予測する	過去の体験を比較する 分析する 計画を立て目標を持つ
状況をありのままに受け入れる	今まで通りにする 受け入れる 利点を探す	何とかなると考える 正常性を願う 状況を楽しむ
生活の改善を図る	調整する 今までの生活を変える	工夫する
将来に向けて準備する	心構えをする 準備する	実践する
知識を広める	情報を得る 参考にする	相談する
自分や胎児をいたわる	無理をしない 制限する	慎重になる 避ける
情緒の安定を図る	気持ちの切り替えをする 閉じこもる	自分に言い聞かせる 愚痴をこぼす
自分の思いを大切にす	待つ こだわる 思いを貫く	欲求に任せる 気にかける 自分の力で解決する
他者を巻き込む	他者を利用する 他者を教育する	他者に指示する 説得する
周囲に気を配る	他者を配慮する 感謝する	報告する
状況や他者の思いを優先する	我慢する 言いなりになる	あきらめる 他者に期待する
何もできない	戸惑う 現実とのギャップを感じる	対応できない

た、看護者は妊婦の立場に立ち、何を必要としているのか考えながら、妊娠出産に関する詳しい情報を提供することで、妊婦は自らが主体であるという認識をもって、取り組もうとする姿勢がもてるのではないかと考える。

Ⅴ. 結 論

本研究の結果、妊婦は妊娠したことによって生じる『妊婦個人に関わる出来事』『日常生活に関わる出来事』『他者との人間関係に関わる出来事』『将来起こりうる出来事』という4つの出来事に対し、12の取り組みの姿勢をもっていた。これらの結果は、妊婦が妊娠経過の中で様々な出来事に対して自分なりの取り組みを行っていることを示していた。看護者はこれらの妊婦の取り組みの姿勢を理解した上で、看護介入していくことが必要である。

本研究の限界として、対象者の特性に偏りがあること、妊婦の取り組みの姿勢に関しての構造やプロセスまでは分析できていないことがあげられる。今後は、これらの視点から分析を重ねていくこと、分娩期や育児期を通じての取り組みの姿勢の変化などを明らかにすることが課題である。

謝 辞

本研究にご協力下さいました妊婦の皆様、医療施設の皆様に、心より感謝いたします。

〈引用文献〉

- 1) 小林臻：初妊婦のもつ妊娠・分娩に対する不安，周産期医学，24(5)，pp.607-612，1994.
- 2) 渡辺典子他：妊婦が感じている不安・問題の内容と対処方法，母性衛生，38(2)，pp.182-192，1997.
- 3) 新道幸恵他：母性の心理社会的側面と看護ケア，医学書院，1990.
- 4) 脇田満里子他：妊娠・分娩・育児期の苦

痛に関する記述的研究(第1報)身体的苦痛に焦点をあてて，日本助産学会誌，11(2)，pp.82-85，1998.

- 5) 入澤みち子他：妊娠・分娩・育児期の苦痛に関する記述的研究(第2報)精神的苦痛に焦点をあてて，日本助産学会誌，11(2)，pp.86-89，1998.
- 6) 浅森裕子他：妊娠経過時期別にみた産婦のもつ出産に対するイメージ内容の分析，第27回日本看護学会集録母性看護，pp.80-82，1996.
- 7) 田中仁美他：産婦の妊娠中と分娩時の対処行動の関連，第27回日本看護学会集録母性看護，pp.83-85，1996.
- 8) 宮本雅巳：セルフケアを援助する，pp.22-23，日本看護協会出版会，1996.
- 9) 戸田律子訳：WHOの59ヶ条お産のケア実践ガイド，農文教，1997.
- 10) 有森直子：出産方針に関する妊産婦の自己決定と助産婦援助との関係，日本助産学会誌，10(2)，pp.97-99，1997.

〈参考文献〉

- ・深津千賀子：初産婦のもつ育児不安，周産期医学，pp.613-317，1994.
- ・原田紀子：子育てをしている母親のサポートグループを通じたエンパワーメント，看護研究，29(6)，pp.497-508，1996.
- ・笹伊久美子：「不安」に関する文献学的研究分娩経過に伴う産婦の不安，三重県立看護短期大学紀要，15，pp.1-7，1994.
- ・稲垣恵子：第1子出産・育児を支える心理的・社会的条件—効果的な支援のあり方を考える—，母性衛生，39(1)，pp.43-53，1996.
- ・加藤春子他：産後1ヶ月時の母親の育児態度に関する考察—初産婦と経産婦の因子分析による比較—，母性衛生，39(1)，pp.61-70，1998.
- ・南部春生：経産婦のもつ育児不安，周産期医学，pp.618-623，1994.
- ・鈴木里加他：子どもを産むことに関する調査，母性衛生，37(1)，pp.4-10，1996.